

[実践報告]

# 笑いを通じた災害被災地の子ども支援： 大道芸訪問活動の実践報告

田久 朋寛(大道芸人)

## 抄録

筆者は平成30年7月豪雨で甚大な被害を受けたH県S町を2018年8月と10月に2回訪問し、主に子どもを対象に大道芸を披露した。8月の大道芸は児童一時預かり施設で実施した。施設スタッフとの前日の協議で合意を得て、子どもとスタッフを対象にアンケートを実施した。フェイススケールを用いて大道芸開始前後の気分の状態を測定した結果、5%水準で気分の有意な改善が認められた。また、大道芸の感想についても質問した。スタッフのみを対象として、大道芸訪問活動の必要性や活動時期の妥当性に関する質問も追加した。

本稿では、アンケートの結果ならびに8月と10月の活動に伴う筆者の観察に基づき、活動の意義や課題、遊びやアートに関連した継続的活動に向けた実践的示唆について考察を行った。子どもの笑顔が大人の安心にも繋がる可能性、子どもが平等に参加できるような配慮の必要性、支援者側で具体的なプログラムを提示する必要性等の実践的示唆を得た。

## Key word

大道芸、笑い、災害復興支援、子ども

## 1.はじめに

2018年に発生した平成30年7月豪雨では甚大な被害が発生した。今後も発生する可能性の高い大規模災害に備え、被災地に暮らす子どもへの支援のあり方に関して、長期的視点に基づく検討が求められる。

子どもの発達に遊びやアート<sup>1)</sup>は大きな役割を果たす。しかし、災害発生時や復興の過程における遊びやアートの効果や実践上の留意点についての研究の蓄積は十分とは言い難い状況である。

筆者は大道芸人である。平成30年7月豪雨で甚大な被害を受けた地区を2018年に2回訪問し、主に小学校に在籍する子どもを対象に大道芸を披露した。

本稿では、筆者の2回の実践を事例として、以下の論点について考察を試みる。

- ・大道芸をはじめとした遊びやアートには、被災地の子どもの気分改善の効果があるか
- ・災害被災地での遊びやアートは、どのような内容・時期・場所が妥当か
- ・継続的な支援につなげるためにどのようなことを考慮する必要があるか

1回目の訪問時に、訪問先である児童一時預かり施設のスタッフとの事前合意の下で、子どもに対して3問の設問からなるアンケートを実施した。スタッフには子どもと同じ質問以外に3問を追加したアンケートを実施した。アンケートの結果と、2回の訪問の際の筆者の観察をもとに、上記の論点の考察を行う。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、災害と遊び・アートに関する先行研究の概観を行う。第3節では、2回の訪問活動の詳細を記す。第4節では、1回目の訪問時に子どもとスタッフを対象として実施したアンケートの概要をまとめ、第5節でその結果を記す。第6節では、アンケートの結果と筆者による観察をもとに、本事例の考察を行う。

## 2. 自然災害と遊び・アートに関する研究概観

### 2-1. 遊び・アートの一般的な効用

こども環境学会によると、子どもの発達に対して遊びには一般的に以下のような効用がある[こども環境学会 2018]。

- ・運動能力の獲得
- ・言語や語彙の獲得
- ・社会性の獲得
- ・自立心や自律心、創造性の醸成

遊びと同様にアートも子どもの発達に対して大きな役割を果たす。例えば大人が子どもに本を読み聞かせることは言語の獲得に役立つ。病気などで日々の生活に制約のある子どもがアート活動に参加することで、活発に過ごす時間が増え、肥満を防止したり、退屈や不安を和らげたりすることに役立つ[All-Party Parliamentary Group on Arts, Health and Wellbeing 2017]。

### 2-2. 災害発生時の課題

大規模な自然災害が発生すると、子どもが自由に遊ぶことのできる場所が極端に制限される。遊ぶ機会が減ることによって仲間同士の関係作りから学ぶ機会も減少する。また、歩行数の低下や座位時間の増加により、体力低下や肥満の増加へとつながる可能性がある[岡崎 2018]。

避難により環境の大きな変化を強いられることで子どもは大きな不安やストレスを感じる。一方で、勝木は、東日本大震災発生後の宮城県で遊びの支援を行う団体への聞き取り調査の中で、子どもと保護者が遊ぶことに対する罪悪感を持っている様子が観察されたことを明らかにした[勝木 2015]。田口は、被災地の子どもの発達において、安心して話す大人との関係作りや情緒的な関わりが必要であると指摘する[田口 2017]。

## 2-3. 復興プロセスにおけるニーズの変化

金によると、大規模災害発生時には、被災者の心理状態はおおむね以下のような段階を経て変化する[金 2006]。

- ・茫然自失期(災害発生数時間から数日後)
- ・ハネムーン期(災害発生数日後から数週間または数か月後)
- ・幻滅期(災害発生数週間後から年余)

災害発生直後には驚愕、恐怖体験により無感覚や感情の欠如が起こる(茫然自失期)。その後のハネムーン期では被災者同士の独特の連帯感が芽生え、利他的行動が目立つ。被災地外部の人々の関心が薄れる頃になると、被災者は無力感や倦怠感にさいなまれることが多くなる(幻滅期)。被災地に日常が戻り始めると、多くの人々が生活再建への自信を取り戻していく。一方で孤立無援の状態が続くと、PTSDやうつ状態などの精神的症状が長引く懸念もあるため、長期的な支援が必要となる。

災害発生直後には、食や睡眠が保障されることや寒暖の厳しさからの生理的安全が確保されることが最も重要である[富永 2012]。また、子どもにとっては、家族や周囲の人々に見守られていると感じることのできる安心感の確保も重要である[田中 2012]。

日本心理臨床学会支援活動委員会は、被災地の子どもの心理的支援に関連して、「災害後に必要な体験の段階モデル」を公表している[日本心理臨床学会支援活動委員会 2011]。モデルの作成者である富永は、安全・安心を体感することのできた次の段階である第2段階において、避難所に遊びのボランティアを派遣することの必要性を指摘し、学校再開時には、心理教育体験を実施する前に体を動かす等のリラクゼーションやゲームを行うことを推奨する[富永 2012]。

## 2-4. 自己効力感の重要性

大規模な自然災害は子どもの心身に大きな負担を与える。極度のストレスにさらされるとPTSDの発症が懸念される。しかし、トラウマとなるような出来事を経験しても全員がPTSDを発症するわけではない。文部科学省が東日本大震災の被災地に住む子どもの保護者を対象に実施した調査では、2012年時点でPTSDの疑いのある症状が少なくとも1つ以上見られた子どもの割合は14.1%であった[文部科学省 2013]。

野村・杉山は、PTSDの発症や程度の大きさは、災害からの復旧の迅速さ、サポート資源の豊富さ、レジリエンスが関連すると指摘し、子どもが自己効力感を高められるように周囲の大人が関わっていくことが重要であると述べている[野村・杉山 2013]。田中は、子どもの自己効力感を養うために遊びが有効であると指摘する[田中 2012]。

遊びやアートに携わる者が被災地の子どもへの支援を行う際には、災害発生から日の浅いうちは子どものリラックスにつながるような内容での支援を行い、長期的な支援を行う際には、子どもの自己効力感の向上につながることも念頭に置いたプログラムを用意することも求められていると言えるだろう。

## 2-5. 被災地の外部から支援を行う際の留意点

大規模な自然災害が発生した際には、遊びやアートに携わる者の多くは、被災地の外部から支援に関わることになる。他の分野の専門職やボランティアと同様に把握しておくべき留意事項がある。ボランティアの心構えについては、多くの自治体や社会福祉協議会がパンフレットを配布している。また、WHOが災害支援の手引きを公開している[WHO 2011]。主な内容は以下の通りである。

- ・安全、尊厳、権利を尊重する
- ・相手の文化を尊重した行動をする
- ・支援を押し付けたり、相手の心に踏み込んだりすることは避ける

田中は、支援者が被災者の被災状況を無理に聞き出すことは避けるべきだと指摘する[田中 2012:p.37]。工作などの創作活動は自己表現が可能となる反面、コントロール感の伴わない感情が表出する可能性もある[富永 2011]。このような点に留意しつつ、現地のリーダーや専門職と連携して活動することが求められる。

## 2-6. 災害発生時の実践に関する研究

東日本大震災や平成30年7月豪雨の被災地では遊びやアートに関する様々な支援活動が行われた。しかし、被災地での遊びやアートの実践活動を詳細に記録し、内容の評価や効果の検証を行った論考は限られる。「遊びの出前」に関する考察を行った萩原等[萩原等 2012]や、ハンドツリーアートについて詳細をまとめた酒井は論考の一例である[酒井 2013]。この2つの論考は実践上の示唆を多数含むが、効果の検証については未解決の課題として残されている。

小児医療の分野では、遊びやアートの効果について、定量的手法を用いた検討も行われている。遠藤等は、入院中の子どもと看護師が4度遊ぶ介入研究を実施し、介入により不安が減少し、自己効力感が増加したことを明らかにした[遠藤等 2001]。Sridharan & Sivaramakrishnanは、ケアリングクラウン(臨床道化師)が入院中の子どもと保護者の不安の減少に有意な効果があることを明らかにした[Sridharan & Sivaramakrishnan 2016]。小児医療分野で行われている研究手法も援用しながら、内容や効果に関する知見を蓄積し、被災地の支援に携わる人々の間で広く共有することが課題である。

### 3. 大道芸訪問活動

筆者は2018年8月23日、10月20日の2回にわたり、平成30年7月豪雨で甚大な被害を受けたH県S町を訪問し、主に子どもを対象に大道芸を披露した。本節では、活動の詳細を記す。

#### 3-1. 1回目の訪問(2018年8月23日)

災害発生から約40日後の2018年8月23日に1回目の訪問を行った。災害ボランティアの団体が7月下旬に被災地の子どもを花火大会に招待する計画をしていたが天候不順で中止となった。代替行事を企画することになり、筆者に大道芸披露の依頼が来た。

大道芸は夏休み期間の小学校の空き教室を利用した児童一時預かり施設で実施した。実施前日に児童一時預かり施設のスタッフ当日披露する芸の内容ならびにアンケートの内容について協議し、実施の了承を得た。なお、8月の時点では、小学校の体育館は避難所に、グラウンドは土砂置き場になっており、土砂が流入した家屋の多くは手つかずの状態であった。

施設では約30分演技を行い、子ども13名とスタッフ4名が鑑賞した。披露した演目は表1にまとめた。

演目	概要・意図
バルーンアート	ハートとプードルのカップルに見立てたバルーンの作品
絵本マジック	絵が出現するマジック。現象がわかりやすく拍手の練習に適する
コインの出現・消失	観音扉が2つある箱の片方の扉にしまったコインが消失・出現するマジック。実際にはコインが隣の扉の方へ移っているのが見える
ボール	3個から5個のボールを用いたジャグリング
カラーコーン	駐車場で見かけるカラーコーンを用いたバランス芸とジャグリング
コップの水の消失	子ども1名が参加し、筆者とともにコップの水を消失させるマジックに挑戦。筆者の水は子どもが見ていない隙に飲んでしまう演出
クラブ(こん棒)	クラブ4本を用いたジャグリング

表1 大道芸の実演内容

まずバルーンアートを披露した。前日の協議でバルーンの割れる音を好まない子どもがいると報告を受けたため、当日は他会場で披露するものより本数を減らし割れる可能性の少ない作品を披露した。

その後はマジックとジャグリングをほぼ交互に披露した。マジックはタネが見えている様子を意図的に見せる演出手法を用いたものである。コインのマジックのタネを見つけた子どもは一斉に笑い、筆者を指さしながら「今ズルした」と大きな声をあげた。また、日常生活で見かける範囲の水を怖がる子どもはいないことが前日の協議で確認されたため、コップと水を用いたマジックも披露した。ジャグリングは専用の道具だけでなく、日常的に見かけるカラーコーンも使用した。演技のオチとしてカラーコーンを頭からかぶると大きな笑いが起きた。

笑いや拍手、歓声が終始絶えない演技となったが、コップと水を用いたマジックでは参加を希望した子ども1名が参加することができず、終了後に少し不満を抱いている様子も見られた。

アンケート終了後には、トランプとトランプマジックの入門書を施設に贈呈し、入門書に記載されているトランプマジックを披露したが、実際にトランプを手を持ち遊ぼうとする子どもはいなかった。一方で、大半の子どもがスタッフにガムテープを用いて新聞紙を棒状にした即席のクラブを作ってもらい、ジャグリングに見立てて投げてキャッチする遊びに挑戦していた。

### 3-2. 2度目の訪問(2018年10月20日)

2018年10月20日に同じ地域を再び訪問した。災害ボランティア団体主催による復興祭のステージイベントとして約30分大道芸を披露した。

会場は、8月の時点では災害ボランティアの集合場所となっていた公園である。8月の時点では重機などが置かれていたが、復興祭に合わせて片付けが行われた。8月には土砂置き場となっていた小学校のグラウンドの土砂もなくなっており、多くの子どもがグラウンドを走り回る様子が見られた。一方で全壊した家屋や施設の多くは8月と変化のない状態であった。

復興祭には8月に大道芸を見た子どもの約半数が会場を訪れ、大道芸を鑑賞した。会場全体では大人を含め約50人が大道芸を鑑賞した。内容は8月とほぼ同じであるが、野外で音に対する不安感が小さくなることから、バルーンアートは7本を用いてアニメのキャラクターを作る演目に変更した。天井の制約がないため、最後にディアボロと呼ばれるコマを高く上げる芸も追加した。コマのキャッチを一度失敗したが、かえって客席との一体感が生まれたように筆者は感じている。

筆者の帰宅後に、大道芸を見た子どもが会場周辺に置いてあるカラーコーンを浮かび上がらせる芸を真似して遊ぶ様子が見られたという報告を主催者から受けた。

## 4. アンケートの概要

### 4-1. 対象

2018年8月に大道芸を披露する前後に、アンケートを実施した。対象は大道芸を鑑賞した子ども13名ならびにスタッフ4名である。

### 4-2. 質問内容

アンケートは、子ども・スタッフに共通する質問項目3つと、スタッフのみを対象とした質問項目3つからなる。

まず子ども・スタッフに共通する質問の概要を述べる。気分の状態を測る尺度として、西田・大西のフェイススケール<sup>3)</sup>を用いた[西田・大西 2001]。また、大道芸の楽しさについて10点法で尋ね、自由記述形式で大道芸の感想を尋ねた。

スタッフのみを対象に追加した質問は以下の通りである。

- ・被災地域で大道芸人等の芸能家が笑いの活動を行うことは必要だと思いますか
- ・今回の大道芸を実施した時期は適切だと思いますか
- ・子ども達の笑いを増やすために、どのような支援が必要だと思いますか

なお、フェイススケールのみ大道芸鑑賞前後の合計2回記入を行い、その他の質問は大道芸の鑑賞後に回答を行った。

### 4-3. 質問内容

気分の変化を検定するため、フェイススケールの回答は、最も気分の状態の良いイラストを5点、最も気分の状態の悪いイラストを1点とする5点法で数値換算し、ウィルコクソン符号付順位和検定により検定を行った。また、開始前のフェイススケールと大道芸の楽しさについての回答との間のスピアマン順位相関に関する検定を実施した。なお、大道芸の楽しさについては、スタッフ1名の回答に欠損があり、スピアマン順位相関の検定の際にのみ該当の回答を除外して検定を行った。いずれの解析も子どものみの回答、子ども・スタッフ全員の回答について解析を行い、有意水準を5%に設定し検定を行った。解析には統計ソフトRのver3.2.0を使用した。

### 4-4. 倫理的配慮

大道芸を披露する前日に児童一時預かり施設のスタッフと協議を行った。アンケートのすべての質問項目に関して実施の可否を確認した。実施当日にアンケートについて不安を感じる子どもがいたらスタッフの判断で中止できることを条件に実施の承諾を得た。また、プライバシーや家庭に関する質問をしないこと、写真撮影を行わないことも書面で同意した。アンケートの結果は学術集会ならびに学術論文公表のみに使用するものとし、公表の際には回答の匿名性を担保し、実施地域を完全に特定できる表現は使用しないものとした。実施当日には、大道芸の披露に先立って、子ども全員にアンケートの回答は任意であり、アンケートに回答しなくても全員が大道芸を鑑賞できることを書面と口頭で説明した。

## 5. 結果

大道芸鑑賞前後のフェイススケールのウィルコクソン符号付順位和検定の結果を表2に示した。子どものみの回答の解析では5%水準で、子ども・スタッフ全員の回答の解析では1%水準で有意な改善が認められた。

大道芸鑑賞前のフェイススケールと楽しさに関する回答との間のスピアマン順位相関は表3に示した。子どものみの回答の解析、子ども・スタッフ全員の回答の解析のいずれの場合でも5%水準で有意な相関が認められた。すべての質問への回答は表4にまとめた。

対象	検定統計量	P値
子どものみ (n=13)	41.500	0.023*
子ども・スタッフ (n=17)	87.500	0.001**

表2 フェイススケールの検定結果 \*\*は1%水準で、\*は5%水準で有意であることを示す

対象	スピアマン順位相関	P値
子どものみ (n=13)	0.616	0.025*
子ども・スタッフ (n=16)	0.538	0.032*

表3 スピアマン順位相関の検定結果 \*は5%水準で有意であることを示す

## 6. 考察

### 6-1. 気分の状態・変化の検討

子どものみ、子どもとスタッフ全員を対象とした場合の両方で、大道芸鑑賞後に気分の有意な改善が見られた。子どもにも内容が理解しやすく、笑いが含まれる演技であったことが気分の改善につながった要因であると考えられる。子どもの感想にも、楽しかった、すごかったという記述が多数見られた。内容が適切であれば、災害被災地での遊びやアートが子どもの一時的な気分の改善に有効であることを示唆する結果が得られたことが、本事例の意義である。

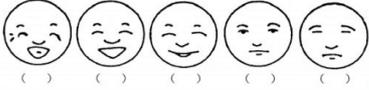
※子ども・スタッフに共通した質問	
1. 気分の状態 (フェイススケール)	
	
5      4      3      2      1 ※検定実施時に換算した点数	
子どもの回答	
開始前 5点: 4名 4点: 2名 3点: 7名	
終了後 5点: 10名 4点: 2名 3点: 1名	
スタッフの回答	
開始前 4点: 1名 3点: 3名	
終了後 5点: 4名	
2. 楽しかったですか (最も楽しくなかったを1、最も楽しかったを10とする10点法)	
子どもの回答	
4点: 1名 7点: 2名 10点: 10名	
スタッフの回答	
9点: 1名 10点: 2名 ※1名分の欠損値あり	
3. 大道芸の感想 (自由記述: 以下自由記述はすべて原文ママ)	
子どもの回答	
・すごく楽しかった (類似回答5名)	
・おもしろかった	
・全部おもしろかった。とくにマジックがすごかった。またやってほしいと思った。	
・コーンをあごにのせるのがすごかったです。	
・いろいろなマジックが見れて楽しかったです (類似回答3名)	
スタッフの回答	
・楽しくすごすことができよかったです。子ども達の笑顔が見れたこと、笑い声がきけた事ができてよかったです。	
・子どもたちが、笑顔になっていて、とても良かったと思いました。	
・こどもたちもたのしんでいたようでよかったです。大人の私もたのしませて頂き、ありがとうございました。こういう支援の形もあるのだなととても勉強になりました。ありがとうございました!	
・①オリジナルの芸もあり子どもにも分かり易く楽しい内容でした。②子ども1人ではなく全員が参加できる手品か芸があつたらもっと良かったかもしれません。	
※スタッフのみを対象とした質問	
4. 被災地域で大道芸人等の芸家が笑いの活動を行うことは必要だと思いますか。(三択)	
必要である: 3名 必要でない: 0名 どちらとも言えない: 1名	
5. 今回の大道芸を実施した時期は適切だと思いますか。(三択)	
適切である: 4名 もっと早い時期がよい: 0名 もっと遅い時期がよい: 0名	
6. 子ども達の笑いを増やすために、どのような支援が必要だと思いますか。(自由記述)	
・子どもたちが、子どもらしく、笑顔になれる時間をつくってあげること	
・お笑いの方たちや今日来られた大道芸人さん、子ども達がよろこぶ事	

表4 すべての質問項目の回答

子どものみ、子どもとスタッフの双方を対象とした場合の両方で、大道芸開始前のフェイススケールと楽しさに関する回答に有意な相関が認められた。開始前の気分の状態が下がるにつれて大道芸を楽しく感じない傾向があると解釈できる。一度限りの鑑賞のみならず、継続的な支援も必要であることを示唆する結果である。

開始前の子どものフェイススケールに関しては、全員が中程度以上と回答したが、田中によると、災害復興プロセスのハネムーン期までは、子どもが不安を感じていても表明を控える場合がある[田中 2012]。本事例でも気分の状態が良くない場合でもその表明を控えた子どもが存在する可能性は否定できない。

大道芸の感想に関するスタッフの回答には、子どもの笑う様子を見ることができてよかったという旨の感想が複数あった。千葉は、災害時には大人の不安が子どもに影響することがあり、大人も支援する必要があることを指摘するが[千葉 2015]、スタッフのアンケートの回答は、子どもの安心や笑顔を見ることが大人の安心につながる可能性もあることを示唆する内容である。この点を本事例の2つ目の意義として指摘したい。東日本大震災発生時の避難所では「心のケア」を標榜する団体が一部の避難者から忌避された例もあったとされる[富永 2012]。大人も第三者に安心して相談しやすい状態を醸成するために、多世代で遊びやアートに触れ合い笑える時間をつくるのが有効である可能性がある。効果を十分に発揮するために、保健師や臨床心理士などの専門職と提携し知見の共有が必要であると筆者は考える。

## 6-2. 活動時期や場所の妥当性

スタッフを対象に尋ねた活動時期の妥当性に関する質問には全員が適切であると回答した。安心・安全を保障し、子どもが遊べる空間を確保するには、大規模な災害の場合には発生から1か月程度要するものと考えられる。また、8月の活動では子どもの大きな笑い声が聞かれたが、避難所で実施した場合、不快に思う人がいた可能性もある。子どもが楽しく遊ぶことが許容される空間の有無に関して現地のリーダーと確認を行ったうえで、遊びやアートに関する活動を本格的に展開することが望ましいと考えられる。

## 6-3. 平等な参加機会の確保

大道芸の感想に関するスタッフの感想から、1人だけでなく全員が参加できる演目があった方がよかったという主旨の回答があった。災害に伴う不安やストレスを抱えている可能性がある子どももいる場合には、多くの子どもが平等に活動に参加できる機会を確保するよう慎重な配慮が必要であった。

## 6-4. 継続的活動への示唆

スタッフのみを対象とした「子ども達の笑いを増やすために、どのような支援が必要だと思いますか」という質問では、具体的な方法に関する言及はなかった。災害発生から40日程度の段階では、地域の大人が子どもの支援について具体的な展望を描けないことを示唆している。富永は、外部からの支援者が具体的な支援内容を自ら提示することによって被災者が初めて内容を選択可能になると指摘する[富永 2012]。遊びやアートについても同様であると推察される。

大道芸のような鑑賞が中心となるアートは、演じる側と見る側の役割が固定されやすい。継続的な支援を行う際には、子どもがより自発的に遊んだりアートに触れ合ったりできる内容が必要であ

ると筆者は考える。8月の訪問時に子どもが新聞紙をクラブに見立てて投げていることや、10月の訪問時にカラーコーンを浮かび上がらせる遊びに挑戦していたことは、実践活動に対する大きな示唆である。鑑賞を通じて子どもが興味を持つ内容を体験でき、自己効力感につながることも見据えて目標を立てながら体を動かせるような具体的なプログラムを用意することも検討に値する。

### 6-5. 研究方法論上の課題

プライバシーを配慮し、アンケートには子どもの年齢や性別に関する項目を含まなかった。大道芸の内容は年齢や性別で印象が異なる可能性がある。また、厳密な意味で気分の改善を実証するには、対照群を設定した調査が必要となる。さらに、本稿で用いた質問は主に主観的尺度であり、子どもやスタッフが筆者の望む内容を配慮して回答を行った可能性もあり、特に気分の改善について過大評価している可能性も否定できない。

上記の点は実証研究の方法論として明確な課題であるが、実証の厳密さを優先して質問項目を増やしたり、対照群を設定したりするのは実践的、倫理的観点から不適切である。遊びやアート、あるいは笑いの意義について検証を重ね、より効果的な内容を考案していくために、様々な制約のある中でどのような手法を用いることが可能なのか、学術的観点からの議論が必要であることを今後の論点として提起して、本稿の結びとしたい。

### 注

- 1) 本稿では、鑑賞するだけでなく、自らが創造性を発揮して表現や創作を行うことも可能な芸術や芸能のことを総称してアートと表現する。
- 2) 田中によると、自己効力感とは「出来事に対して自分が何らかの働きかけ、目的を達成できる能力を持っているという感覚」である[田中 2012:p.57]。
- 3) フェイススケールは、表情の異なる顔のイラストを複数使用した尺度である。自らの気分の状態を言葉で表現することが難しい子どもや高齢者の気分の状態を把握する簡易の尺度として医療現場で使用されている。

### 参考文献

All-Party Parliamentary Group on Arts, Health and Wellbeing, 2017, Creative Health: The Art for Health and Wellbeing (<https://www.culturehealthandwellbeing.org.uk/appg-inquiry/> 2019.8.28 最終閲覧)

千葉望, 2012, 「<こども>と<保護者>を丸ごと支援する: 「こころスマイルプロジェクト」の活動を追って」『震災学』第7巻 pp.43-56, 東北学院大学.

遠藤芳子、塩飽仁、福井里佳,2001,「入院中の子どもへの遊びによる看護介入の効果に関する研究」『日本看護研究学会雑誌』第24巻第4号 pp.57-68,日本看護研究学会.

萩原豪人、岡本亜美、藤井良隆、久田満, 2013,「東日本大震災において被災した子供に対する心理的支援:避難所生活を送る子どもへの「遊びの出勤」活動」『コミュニティ心理学研究』第15巻第2号 pp.74-84,日本コミュニティ心理学会.

勝木洋子,2015,「生活復興時に見る東北3県の子ども・子育て支援:健康と遊びからのアプローチ」『神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要』第1巻, pp.73-82,神戸親和女子大学.

金良晴,2006,『心的トラウマの理解とケア第2版』,じほう.

子ども環境学会,2018,『遊びで育つこども』([http://www.children-env.org/%E3%83%80%E3%82%A6%E3%83%B3%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=461](http://www.children-env.org/%E3%83%80%E3%82%A6%E3%83%B3%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89/?action=common_download_main&upload_id=461) 2019.8.28最終閲覧)

文部科学省,2013,『平成24年度非常災害時の子どもの心のケアに関する調査報告書』([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/hoken/1337762.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/1337762.htm) 2019.8.28最終閲覧)

日本心理臨床学会,2011,([https://www.ajcp.info/heart311/?page\\_id=2160](https://www.ajcp.info/heart311/?page_id=2160) 2019.8.28最終閲覧)

西田元彦、大西憲和,2001,「笑いとNK細胞活性の変化について」『笑い学研究』第8巻 pp.27-33,日本笑い学会.

野村和代、杉山登志郎,2013,「子どもの心身を守るために必要なこと」『発達』第34巻第133号, pp.26-30,ミネルヴァ書房.

岡崎勘造,2018,「調査研究からみた被災地の子どもの活動量の変化」『震災学』第12巻 pp.61-73,東北学院大学.

酒井正,2013,「被災地におけるアートプロジェクトの展開と可能性」『環境芸術』第12巻 pp.43-50,環境芸術学会.

SridharanEmail, Kannan and Sivaramakrishnan, Gowri,2016, “Therapeutic Clowns in Pediatrics:A Systematic Review and Meta-Analysis of Randomized Controlled Trials-Rorrigendum” European Journal of Pediatrics 第175巻第10号 pp.1353-1360, Springer.

田口久美子,2017,「東日本大震災後の子どもの発達について:幼児期から学齢期に着目して」『心理科学』第38巻第1号 pp.38-54,心理科学研究会.

富永良喜,2011,「災害と子どもの心のケア:災害後に必要な体験の段階モデルの提唱」『臨床心理学』第11巻第4号 pp.569-574,金剛出版.

富永良喜, 2012, 『大災害と子どもの心:どう向き合い支えるか』岩波書店.

WHO,2011,『心理的応急措置(サイコロジカル・ファーストエイド:PFA)フィールド・ガイド』([https://saigai-kokoro.ncnp.go.jp/pdf/who\\_pfa\\_guide.pdf](https://saigai-kokoro.ncnp.go.jp/pdf/who_pfa_guide.pdf) 2019.8.28最終閲覧)